

「やうなり」▽「やうだ」の通時的変化

山口堯二

一 はじめに

二 用法の概観と助動詞化の概要

三 例示・一致・比況の用法

四 単独性の用法に見る通時的変化

五 結 び

「やうなり▽やうだ」は、形式名詞「やう」と指定の助動詞「なり」の連語にはじまり、近代語では一語化して、現実性の不透明な事態の様相を推定する助動詞になった。その用法には、類似するもの同士を関係づける、類縁性の用法（例示・一致・比況）と事態の様相を単独に表す、単独性の用法とが大別できる。例示・一致の用法には変化が乏しいが、近現代語の比況の用法にはその様相を不定的に表すことや類似度を強調する副詞の共起がふえている。通時的変化は単独性の用法によりめだつ。近現代語のその連用法には、目標を表す言い方など、事柄を志向的に捉える使い方がめだち、連体法には意識や感覚を表す体言などの下接ぐるみで、不透明な様相を捉える傾向がふえている。述語法には、現実性の不透明な事態の様相を確信のもてないまま、感覚や直観によっておおよそのさまとして試写・概言するような推定性がめだってきている。

一 はじめに

古代語の「やうなり」は、形式名詞「やう(様)」と指定の助動詞「なり」の連語である。指定の助動詞「なり」の通時的変化によって、「やうなり」の基本形は通時的に「やうなり√やうなる√やうな√やうぢや√やうだ」と変わっていく。古代語「やうなり」と近現代語「やうだ(ようだ)」とは通時的に連続するので、その形態上の変化を含めた連続相を、中間の形を略して「やうなり√やうだ」の形で示す。

狭義の漢語としての「やう(様)」は、外から見た物事の形や様子、従うべき手本・様式などを表す語であるが、古代語においてもさらに外からは見えない内的な事情・わけなどの意にも用いられた。それらの「やう」は、それ単独でも主語などに用いられる実質名詞であるが、別に動詞「言ふ」「思ふ」などに下接する、「言ふやう(は)」「思ふやう(は)」などの形で、言ったり思ったりする内容に相当する引用句を導く、形式名詞的な用法もあった。

「やうなり」の「やう」も、格助詞「の」「が」や活用語連体形などによる、連体的な上接成分を伴い、意味の実質をその指示内容に依存する形式名詞であった。しかし、その「やう」も、古代語では右にいうそれ以外の「やう」

との連続性もかなり保っていたであろう。「やうなり」は、その「やう」でその上接成分の指示内容に含まれる様相を体言的に抽出するとともに、指定の助動詞「なり」で多かれ少なかれその様相に述語性を担わせるものであった。

近代語では古代語の「やう」に認められた実質名詞の用法は次第に衰退する。「やうなり」における以外の形式名詞「やう」の用法も衰退した。「やうなり√やうだ」はそれらとの連続性を失っていくとともに、一語の助動詞になっていくのである。

近現代語の「やうだ(ようだ)」は、一方で古代語以来の用法もかなり維持しながら、その述語法を中心に推定の助動詞の一つになる。しかし、それについての通時的な研究はきわめて未開拓である。本稿はその「やうなり√やうだ」における通時態を用法別に探って、その通時的変化に一応の見通しをつけようとするものである。

二 用法の概観と助動詞化の概要

「やうなり√やうだ」の用法には、様相の類似するもの(対象や事柄)同士を関係づける用法と、その様相をそれ単独に表示する用法とが大別できる。そのそれぞれを、仮りに類縁性の用法、単独性の用法と呼ぶことにしよう。

類縁性の用法には、さらに、①上接成分の指示内容が後

続成分のそれを代表するものとして、例示の意がめだつ用法、②上接成分の指示内容と後続成分のそれとに、一致する意がめだつ用法、③上接成分の指示内容が、他の成分のそれと様相的に類似することを表す、比況の意がめだつ用法が区別できる。

「やうなり」の「やう」の、上接成分に依存しながら、その様相を体言的に抽出するという、依存・抽出の仕組みは、どちらかと言えば、これらの類縁性の用法にこそ先導されたものであろう。古代語の「やうなり」について研究的に注意されてきたのも類縁性の用法であり、とりわけその比況の用法であった。しかし、これらの例示・一致・比況という類縁性の用法は、近現代語においても注意しなければその変化がわかりにくいほどに継承されている。

「やうなり√やうだ」の通時的変化は、その単独性の用法においてよりめだつが、それらの通時態をたどるためにも、近現代語における機能的な助動詞化の進行のあらましを、まずおさえておくことにしたい。

「やうなり√やうだ」が近現代語において助動詞化するということは、古代語のそれにおける形式名詞「やう」が、上接成分に依存してその指示内容に含まれる様相を体言的に抽出してきた働きの基礎に、助動詞「なり√だ」とともに一体化して、その様相を抽出する作用性のほうを高めて

きたということと考えてよい。近現代語の「やうだ（ようだ）」は、たんに与えられた様相を表すだけでなく、そのようにしてすでに述べた単独性の用法、とりわけその述語法を中心に、むしろ現実性の不透明な事態についても、その様相を試写したり概言したりする傾向を強め、次第に現実のありようを推定するという作用性を高めてきたと見てよい。他の推定の助動詞の通時的変化、たとえば「べし」の衰退なども、そのような「やうなり√やうだ」の助動詞化にかかわった可能性がある。

古代語の「やうなり」と近現代語の「やうだ（ようだ）」の間には、単独性の用法を中心に以上のような差があると見られるので、以下、古代語以来、概して変化の乏しい類縁性の用法をまず取り上げ、その後、単独性の用法について検討することにしたい。

「やうなり√やうだ」の用法には、後続成分との関係などから、用言文節にかかる連用法、体言文節にかかる連体法、および、それ自体が述語成分になっている場合がある。その述語成分には、終止法などで文末に位置する場合のほか、後続成分との関係上、中止法・接続法前句などにおけるそれもある。それらの述語成分になっているものは、以下まとめでは述語法と呼ぶことにする。

なお、古代語の形式名詞「やう」は、「などやう」「かや

う」「かくやう」「さやう」などの形で、副助詞「など」や指示語「か」「かく」「さ」などにも下接した。それらが格助詞「に」を伴う場合の「やうに」の用法も、後世の「などのやうに」「このやうに」などとの連続性において、「やうなり√やうだ」の用法ともつながるので、本稿ではそれらも「やうなり√やうだ」の仲間として扱うことがある。

三 例示・一致・比況の用法

まず、類縁性の用法に含まれる、例示・一致・比況の用法について順次検討する。

上接成分の指示内容が後続成分のそれを代表するものとして、例示の意がめだつ用法は、その上接成分に「体言十の(が)」「体言十など十の(が)」の来る場合が中心になるだろう。その後続成分との関係には、連用法と連体法がある。述語法にはこの用法はめだたない。次の(1)は連用法、(2)は連体法の例である。

(1) かかる古事の中に、まろがやうに実法なる痴者の物語はありや。いみじくけ遠き、ものの姫君も、御心のやうにつれなく、そらおぼめきしたるはあらじな。

(源氏・蜚)

・成親・俊寛が様に、遠き国遙かの嶋へもうつしやらんずるにこそ。(寛一本平家・三・法皇被流)

・たのふだ人のやうに、俄にものを仰せ付らるゝおかたはござるまひ。(虎明本狂言・秀句傘)

・わしがやうに根から男のない身でさへ見事堪忍しまするぞや。(浄・堀川波鼓・上)

・菊治さんのやうにお若い方に、あの奥さんは分りつこないんですよ。(川端康成・千羽鶴・絵志野・三)

(2) 長恨歌、王昭君などやうなる絵は、おもしろくあはれなれど、(源氏・絵合)

・もとよりをのれらがやうなる下臈のはてを、君のめしつかはせ給ひて、(寛一本平家・二・西光被斬)

・白化の今の世の中に、中く二人の衆のやうな、青ひ事ではいけません。(酒・陌婦人伝)

・夫れよりはお神輿をこしらへてお呉れな、蒲田屋の奥に飾つてあるやうな本当のを、(樋口一葉・たけくらべ)

・このやうな力仕事は、私にとつていまがはじめてではない。(太宰治・斜陽・二)

次に、上接成分の指示内容と後続成分のそれとに、一致する意がめだつ、一致の用法について述べる。これにも例(3)の連用法と、例(4)の連体法はめだつが、述語法の例は得にくい。

(3) 大人になりたまひて後は、ありしやうに御簾の内に

も入れたまはず、(源氏・桐壺)

・あはれ親の子を思ふやうに、子は親をおもはざりけるよ。(金刀比羅本保元・中)

・なんぢがしていたやうに、わらはをさせておいてくれひ(虎明本狂言・花子)

・「……わしがするやうにならんせ」と、打掛けの裾に隠し入れ、(浄・曾根崎心中)

・雨の降るに表へ出ての悪戯あつかひは成りませぬ、又此間のやうに風引かうぞと(樋口一葉・たけくらべ)

(4)ことにありしやうなる言づてもしたまはねば、(源氏・夕顔)

・向後モ其時ノ如クニ候ハズ、縦ヒ山上ニ御陣ヲ召レ候共、又先年ノ様ナル事決定タルベク候。(太平記・二十)

・こなたからほしひとぞんずるものはくれまらせず、思ふやうなものなほひものじや。(虎明本狂言・二九十八)

・今宵はわしがこゝへ、最後のやうな、悪い奴のうせぬやう留守番して、(伎・与話情浮名横櫛・四幕目)

・然し実際はうちのものがいふ様な勤勉家ではない。

(夏目漱石・吾輩は猫である・一)

例示や一致の用法は、ともに連用法・連体法という修飾

法に偏るのであるが、それはその例示性や一致性が、後続成分のための例示であったり、後続成分の指示内容との一致、不一致であったりすることにおいて、ともに後続成分の修飾法に立ってこそめだつ意味関係だからであろう。述語法では逆にその上接成分の様相自体が判断の焦点になるから、述語法において類似するもの同士の間接づけがめざされれば、比況の意が目立たざるを得なくなるだろう。例示や一致の用法が、連用法・連体法という修飾法に偏るのは、そのせいだと考えられる。

次に、上接成分の指示内容が、他の成分のそれと様相的に類似することを表す、いわゆる比況の用法について述べる。これには次のように(5)の連用法、(6)の連体法、(7)の述語法の例が、それぞれ認められる。

(5)紅葉のやうやう色づくほど、絵に描きたるやうにおもしろきを見わたして、(源氏・夕顔)

・いその方よりかげろふなンドのやうにやせおとろへたる者よろほひ出きたり。(寛一本平家・三・有王)

・葭原雀の鳴く様に、息の有りたけしやべつて、(浄・丹波写作待夜の小室節・中)

・「あの松を見給へ、幹が真直で、上が傘の様に開いてターナーの画にありさうだね」(夏目漱石・坊っちゃん・五)

(6)物語に、ことさらに作り出でたるやうなる御ありさまなり。(源氏・賢木)

・たとへば箸に目鼻めばなをつけたるやうな男であらふとまよよ、おのれがいまのやうにいはいふ事か(虎明本狂言・右近左近)

・仏のよふな男でも、むねのほむらは地獄の廻し。

(伎・東海道四谷怪談・序幕)

・花びらのやうな大きな牡丹雪が、ふはりふはり降りはじめてゐたのだ。(太宰治・斜陽・一)

(7)こなたかなたの目には、季を二つつけたるやうなり。

(竹取)

・おちの為朝が弓の様ならば、わざとおとしてとらすべし。(覚一本平家・十一・弓流)

・行儀作法は糸のころを、屋根へ上げたやうで、さりとなく腹の皮。(浄・仮名手本忠臣蔵・三)

・舗道に霧はよどんで空気は淡い密度の水のようだった。(大江健三郎・人間の羊)

比況の用法については、時代的な変化も多少うかがうことができる。その上接成分には、副助詞「など」を共起させる例が古くから見えるが、近現代語の上接成分には、例(8)のようにその「など」と類義的でより不定度の強い連語「かなんぞ」を共起させ、比況に用いられる状況自体をよ

り不定的に表示する傾向も生じている。

(8)なふあの畜生めが、人の物かなんぞのやうに、酒をのませぬと云て、うらせぬ。(虎明本狂言・河原太郎)

・散り残せかし、露の名残もないものかなんぞのやうに、秋風く。(歌謡・松の葉・水鶏)

・手代は手代で、鼠の子かなんぞのやうに、目が明かぬといふて追ひ出し、(浄・仮名手本忠臣蔵・十)

・今から帰ろうの何のと、おやしき者かなんぞのよぶに、いやみからみをいふのじやアごせんせん。(酒・甲駅新話)

・奸盗かなんぞのやうに、白昼に縛首にせられた。

(森鷗外・阿部一族)

また、副助詞「でも」や「か」を共起させて、比況に用いられる状況を不定的に表す言い方も新たに生じている。「でも」の共起は連用法に多いようだが、「か」の共起は、連用法・連体法・述語法のいずれにも認められる。

(9)ト敵手あいてが傍にでもゐるやうに、真黒になつてまくしかける。(二葉亭四迷・浮雲・一・一)

・耐たりかねて柳之助は水でも飲むやうに一盃の麦酒ビールを尽はして、ほうと息を吐く。(尾崎紅葉・多情多恨・前・一)

・良秀は例の赤い脣を熱でも出た時のやうに震はせな

がら、(芥川龍之介・地獄変)

(10) 半分地の中へ埋められたかのやうに感じたりする頃の操は、最早未亡人であった。(島崎藤村・春・九二)
・島村は自分が生きてゐないかのやうな呵責がつのつた。(川端康成・雪国)

・金閣はこの孤独、この静寂をたのしんでゐるかのやうだつた。(三島由紀夫・金閣寺・二)

ところで、近現代語の比況表現には、右のような不定化とは反対に、比況に用いられる状況の類似度を強調する副詞が共起することも、次のように多くなっている。

(11) むつきのうちの御有さまは、たゞ、形代などを祝ゐたらんやうにて、(増鏡・新島守)

・若ひ後家と嫁入盛の娘の幸領に、器量のよい音曲のなる手代を付て、湯治につかはすはひとへに癩をとらへて、かめのを 氈の灸の蓋をさするやうな物で、しばらくも油断のならぬものぞかし。(浮・世間娘氣質・四)

・アラ月が……まるで竹の中から出るやうですよ、鳥渡御覧なさいヨ。(二葉亭四迷・浮雲・一・三二)

・近藤は殆ど命令するやうに言つた。(国木田独歩・牛肉と馬鈴薯)

・素枯れた芦の色をした髪は、殆ど川のやうに長かつた。(芥川龍之介・老いたる素戔鳴尊・九)

・宿屋の客引きの番頭はちやうど、火事場の消防のやうなものしい雪装束だつた。(川端康成・雪国)

・まるで、俘虜の群のやうだ、とふと私は思った。

(吉村昭・水の葬列・一)

・乃木希典がちやうど封建武士が殿様に殉死するやうな、そういう肉体的な親さを感じさせる自然さで殉死したのは、(司馬遼太郎・殉死・要塞)

比況の用法において、その上接成分に連語「かなんぞ」や副助詞「でも」「か」を共起させ、比況に用いられる状況自体を不定的に表す傾向が生じているのは、後に単独性の用法の箇所述べるように、近現代語の「やうだ(ようだ)」が不透明な様相を試写・概言し推定するようになる変化と連動する現象であろう。比況に用いられる状況に、その類似度を強調する副詞の共起が多くなつてくるのは、一見逆のように見えるが、これも近現代語の「やうだ(ようだ)」に、全体として試写・概言化——推定化が進んできたからこそ、比況の用法の安定には、その類似度を強調する副詞の共起がかえつて必要になつてきたためであろう。そう考えれば、同じ傾向の反映と見ることできる。

類縁性の用法のうち、例示と一致の用法は、連用法と連体法に偏っていた。それらには通時的変化は特に認めがたいが、比況の用法には連用法・連体法、述語法がそなわり、

近現代語では単独性の用法にめだってくる不透明な様相の試写・概言化——推定化と連動する傾向がうかがえると言つてよい。

四 単独性の用法に見る通時的変化

次に、事態の様相を単独に表示する単独性の用法について検討する。古代語のそれは、体言的に抽出した上接成分の様相を指定するだけの言い方であり、連語であったが、近現代語ではその機能的な一語化——助動詞化が進む。その結果、連用法を中心に動作の目的や目標として、事柄の将来的な実現性をめざす傾向を強めたり、連体法・述語法を中心に現実性の不透明な事態について、その様相を試写・概言したりする傾向を強め、主体の志向や感覚を通して現実のありようを推定するという作用的な働きがめだってくる。単独性の用法にも、その連用法には古代語以来ほとんど変わりなく見える面も多いが、そういう新しい用法を加えたり、新しい用法に移っていったりした結果、近現代語では単独性の用法の比重が、例示・一致・比況を表す類縁性の用法よりむしろ大きくなったと見てよからう。

単独性の用法における通時的変化が、助動詞化である以上、その変化は旧い助動詞体系の解消と近代語における新しい助動詞体系の形成との両方にかかわるだろう。当面、

旧い助動詞体系の解消とのかかわりからいえば、「やうなり」や「やうだ」の通時的変化に最も関係するのは、まず推定の助動詞「べし」の衰退であり、次いでその後継ぎの一つと言える「さうだ（そうだ）」の形成と変化であろう。「べし」の担った現実的な意義のうち、事柄の具体的な実現性や現実性の見込みの強い側面は、様態を表すと説かれる、動詞連用形などに承接する助動詞「さうだ（そうだ）」に主として引き継がれたであろうが、事柄の可能性や将来的な実現性をより軽く想定する側面は、近世前期にはおもに推定に用いられていた活用語連体形承接の助動詞「さうだ（そうだ）」や、近世前期以降の「やうだ（ようだ）」に引き継がれたと見てよからう。連体形承接の「さうだ（そうだ）」は、近世後期以降は、伝聞の表示に偏っていくが、近世前期には、むしろ推定の働きが中心であった。^(五)詳しくは別に検討を要するけれども、その頃の「さうだ（そうだ）」は、事柄の可能性を想定するような働きにおいて、むしろ「やうだ（ようだ）」に先行したかもしれない。

以下、そのような見通しのもとに、連用法・連体法・述語法の順に、それぞれ通時的変化のめだつ点を中心に取り上げることにする。

まず、連用法には、古代語以来ほとんど変わりのない面も多い。次にその一斑を示すように、後続成分の状態や結

果を表すような用法や、認識動詞と共起して主体の意識を表すような用法については、特に時代的な変化はなさそうである。

(12)今はた、かく世の中のことも思ほし棄てたるやうになりゆくは、いとたいだいしきわざなり。(源氏・桐壺)

・金閣はだんだんに深く、堅固に、実在するやうになつた。(三島由紀夫・金閣寺・一)

(13)我にもあらずあらぬ世によみがへりたるやうに、しばしはおぼえたまふ。(源氏・夕顔)

・私には金閣そのものも、時間の海をわたつてきた美しい船のやうに思はれた。(三島由紀夫・金閣寺・一)

しかし、古代語ではその事柄に当為性や当然性が強ければ、動作的であれ状態的であれ、その将来的な実現性を意図的にめざす場合、連用成分においても、助動詞「べし」の連用法によることが多かった。⁶⁰「べし」の衰退する近現代語では、そのような「べし」の連用法の一部も「やうだ(ようだ)」に引き継がれていったと見てよいだろう。その古代語の「べし」の連用法とは、次のようなものである。

(14)露ながら折りてかざさむ菊の花老いせぬ秋のひさし
かるべく(古今・秋下)

・さりぬべきをりみて対面すべくたばかれ。(源氏・

空蟬)

・京に、御車率で参るべく、人走らせつ。(源氏・橋姫)

・師走の二日京に入る。暗く行き着くべくと、申の時ばかりに立ちて行けば(更級)

・御はてまで御念仏仕うまつるべく、そこらの僧どもによるづを掟てさせ給。(栄花・たまのむらぎく)

これらの「べく」で示された事柄は、その後続成分の述語動詞にとつては、目的や目標に相当する意味関係にあるが、「やうなり√やうだ」にも、これらの「べし」の連用法に似て、後続成分の目的や目標に相当する意味関係を担う次のような例がある。その早い例は中世前期にも拾えるので併せて示すが、多用化がめだつてくるのは、近現代語においてである。語幹に相当する「やう」の形も、同様に用いられることがあるので、併せてその例も示す。

(15)さらば汝よきやうにはからひ申せ。(金刀比羅本 保元・中)

・世の人の飢ゑずさむからぬやうに世をば行はまほしきなり。(徒然・一四二)

・ソレヤウナコトヲタグイテ、上ノ御用ノタスケニナルヤウニ仕ラウズ。ヲウセ付ラレイト、コイノゾウダゾ。(玉塵・三三才)

・わごりよが心を見うやうにいふた、それほどに思はば、いてはたさうまでよ（虎明本狂言・ちぎりき）

・いづれも傍輩言ひ合はせ、お暇の出る様に取合はせ頼みます。（浄・心中万年草・中）

・どふぞ、一ち度誰ぞにふらせて、此末高慢をいはせぬやうにしてやりたい、（洒・古契三娼）

・それに知れないやうに裏からそつとお這入り遊ばせ。（三遊亭円朝・牡丹燈籠・六）

・此婦人、昔話の上手にて、稚きものにも能く分るやう、可哀なる、をかしき物語して聞かす。（泉鏡花・

照葉狂言・鞠歌・一）

・ねへ今度一処に写真を取らないか、……水道尻の加藤でうつさう。龍華寺の奴が浦山しがるやうに、本当だぜ彼奴は岐度怒るよ、（樋口一葉・たけくらべ）

・召し上りたいものは何でも、たくさん召し上るやうにしなればいけませんね。（太宰治・斜陽・五）

近現代語の「やうだ（ようだ）」の連用法には、このように後述成分の述語動詞の目的や目標に相当する意味關係を担う例がめだつてくるので、その後述成分には意志・希望を表す助動詞や、当為・命令などの志向を担う言い方が共起することも全体に多くなっている。次に一斑を示すように、中世以降、その具体的な後述成分が省略されること

が多くなるのも、その傾向に支えられてのことであろう。なお、目標を表す場合、その実現を願う切実さを表す副詞「どうぞ」「どうか」などを共起することも多くなっている。その副詞には傍点を付す。

(16) たゞ「ともかうも能様に、よきやうに」とぞの給ける。（寛一本平家・三・御座）

・わらははいつも神ほとけをおがむにも、そなたの目のあくやうにとおがみまらす程に、（虎明本狂言・川上）

・若党中間荒子小者に至る迄、大酒を致さぬ様に。馬継ぎ、舟渡し等にて、がうぎがさつを仕つたらば、曲事でおじやんべい。（浄・丹波与作待夜の小室節・上）

・お命別状ないやうと、明暮レ願ひ候所、（浄・新うすゆき物語・中）

・どうぞお気に違はぬやうにと、観音様へ掛ける御苦労。（浄・桂川連理柵・下）

・どうか釣をお止め下さいますやうに、若しもお怪我があつてはいけませんから。（三遊亭円朝・牡丹燈籠・七）

・再び喧嘩のなきやうにと祈られぬ。（樋口一葉・たけくらべ）

次に、単独性の用法の連体法について取り上げる。連体

法は古來それに下接する体言の状態を表すのが基本であるが、そこにも通時的にあまり変わりのない面と、近現代語にめだつ現象とがある。たとえば次のように概して抽象度の高い意義の体言でも被修飾語にしうるといった傾向などは、古くからあつて通時的にあまり変わらないと言えよう。

(例)もの思ひ知らぬやうなる心ざまを、懲らさむと思ふぞかしと(源氏・末摘花)

・なれくしからぬあたりの御簾の中より御果物・御酒など、よきやうなる氣はひしてさし出されたる、いとよし。(徒然草・一七五)

・此やうな無作法は覺悟なふてはならぬ筈。(浄・卯月紅葉・中)

・何歎這入り度もあり這入り度くもなしといった様な容子。(二葉亭四迷・浮雲・一・三)

・絃歌の声のさまざまに沸き来るやうな面白さは大方の人おもひ出で、忘れぬ物に思すも有るべし。(樋口一葉・たけくらべ)

・右のやうな記述から、私は詩人肌の少年だと速断する人もあるだらう。(三島由紀夫・金閣寺・一)

近現代語の連体法にめだつ現象としては、「心持」「心地」「氣持」「氣分」「氣」などの、意識や感覺を表す体言を被修飾語とする言い方、形式名詞「こと」「もの」を下接す

る言い方などの多くなるのが注意を引く。

まず、「心持」「心地」「氣持」「氣分」「氣」などの、意識や感覺を表す体言を被修飾語とする例の一斑を示す。

(例)将某の都づめになつたやうな心持にて、(洒・繁千話)

・親腕で山盛りにして五六杯も喰はなくつちやア、ちつとも物を食べたやうな氣持が致しやせん。(三遊亭

円朝・牡丹燈籠・四)

・ことに君と分れてから、大變世の中が広くなつた様な氣がする。(夏目漱石・それから・二)

・島村はなぜかそれが心のどこかで見えるやうな氣持もする。(川端康成・雪国)

・何か自分が油断のならぬ悪がしこい生きものになつて行くやうな氣分になつた。(太宰治・斜陽・五)

・なんだかどうも私が、お母さまからどんどん生氣を吸ひとつて太つて行くやうな心地がしてならない。

(太宰治・斜陽・二)

これらの意識や感覺を表す体言の類を下接する連体法の例は、近現代語でかなり急速に増加してきている。その点を思えば、このような言い方の増加は、むしろその被修飾語の体言ぐるみで、現実性の不透明な事態の様相を、感覺や直観にたよりつつ試写・概言する傾向が出てきたその現

れと解釈できる。上接成分に不定詞が共起しがちになってきている点も、その解釈を支持するだろう。

形式名詞「こと」「もの」を下接する言い方はたとえば次のように古来ある。

(19) 君思しまはすに、夢現さまさま静かならず、さとしのやうなることどもを、来し方行く末思ひあはせて、
(源氏・明石)

・ 鬼のやうなるもの出でて殺さむとしき。(竹取)

しかし、近現代語ではその言い方が多くなるだけでなく、その形式名詞としての抽象度も高まり、むしろその下接語ぐるみで、不透明な様相を捉えようとしているように見える例が多くなってきた。例(20)が「こと」を、例(21)が「もの」を下接する言い方の例である。

(20) いやむさとした事を申したぶんに御さる、きかせらるるやうな事では御さない。(虎明本狂言・大黒連歌)
・ いとゞおもひがますやうなことが、この末ともに有ふかと案じられます。(人・春色梅児誉美・三・十七)

・ 錆槍で人が突けぬやうな事では役にたたんぞ。(三遊亭円朝・牡丹燈籠・十三)

・ 弟の手紙には、まだチョッキも着てゐないやうなことを書いてありましたけれど。(川端康成・雪国)

(21) おめへはまだ屋敷かたぎがやまねへの。夫ぢやアおれにはぢをかゝせる様な物だ。(伎・東海道四谷怪談・序幕)

・ 「菜ばかりだつけれ。」「さふサマア、菜ばかりのやうなものサ。」(滑・八笑人・二・下)

・ 人なつかしさが温かく溢れて、女に先づ友情のやうなものを感じた。(川端康成・雪国)

・ 幸福感といふものは、悲哀の川の底に沈んで、幽かに光つてゐる砂金のやうなものではなからうか。(太宰治・斜陽・五)

近現代語における連体法には、次のようにその上接成分の末尾に「といふ」や「といった」を用いて、その「と」に上接する成分の指示内容を婉曲化する言い方もよく見かけるようになった。それは通時的には、推量の助動詞の連体法の近代語における衰退を補うものとして、助動詞の体系的な推移にかかわっているはずであるが、その婉曲化も意味の上で、近現代語の「やうだ(ようだ)」が不透明な様相を試写・概言し、推定するようになる傾向に通じるものである。

(22) あの娘なら何が付^づずとほしひといふやうな、男の方へ嫁入する心ゆへ、(浮・世間娘氣質・四)

・ 穴の稲荷の玉垣は、赤うなければ信がさめるといふ

やうな物かい。(浄・仮名手本忠臣蔵・九)

・或難い謎をかけられ、それを解くと自分の運命の悲痛が悉く了解りでもするといつたやうな心持がして、

(国木田独歩・牛肉と馬鈴薯)

・蛇も、私と同様にお父上の逝去を悲しんで、穴から這ひ出してお父上の霊を拜んでゐるのであらうといふやうな気がしただけであつた。(太宰治・斜陽・一)

・乃木希典は独逸留学後、独逸軍人における「外形美」ともいふべきものに傾倒し、その美の信徒といつたやうなものになりはじめており、(司馬遼太郎・殉死・要塞)

なお、連体法については、「やうなり√やうだ」の働きの比較的軽いものとして、指示語に直接下接する例㉔のよくな言ひ方が古来あつた。ここでは以下に示す新しい言ひ方との比較にそなえて、近代語の例をあげる。

㉔此やうなうれしひ事はござらぬ。(虎明本狂言・因幡堂)

・わらはは、一時もそなたに離れている事はならぬに、そのやうな事おしやるものか。(虎明本狂言・花子)

・そなたも、あのやうなおとこと添うていよふよりも、いんだがましであらう程に、さらばいなしめ。(虎明本狂言・吃)

・なんと、蛇の鮠の味はどのやうなものぞ。(嘶・軽

口御前男・三)

近代語では、これらの言ひ方から、おそらく「どのよな」などの短縮形を介して、例㉔に示すやうな連体詞の「こんな」「そんな」「あんな」「どんな」という語形が生じた。

また、便宜、この場にまとめるが、それを介してやがて例㉔に示すやうに、「こんなに」「あんなに」「どんなに」といった新しい語形もさらに生じた。例㉔のそれは「やうだ(ようだ)」の連用法に相当するものであるが、古代語以来引き継がれてきた例㉔式の「やうだ(ようだ)」による言ひ方の占める割合は、それらの新しいものとかなり交替することによって、口頭語を中心にそれだけ狭くなっているはずである。

㉔土に食ひつき死ぬるとても、こんなことはせむものじゃ。(浄・曾根崎心中)

・中々どふもそんな事では堪忍が仕にくい。(浄・新うすゆき物語・上)

・あんなころし文句をおつせへす。(酒・傾城買四十八手)

・どんな嘘をついても、実に受るし。(滑・浮世床・初中)

㉔おまへがどんなに力身なすつても、江戸は繁花の地

だ。(滑・浮世床・初・中)

・ そんなに飲めるものかな、五合で。(伎・東海道四谷怪談・序幕)

・ 何んのあんなに口をすばめる事が有る物かな。(伎・東海道四谷怪談・序幕)

東海道四谷怪談・序幕

・ 私の様な者を、此様にかはひがつて下さるくらゐで、

(人・英対暖語・初・五)

連体法については、近現代語では意識や感覚を表す類の体言、形式名詞「こと」「もの」を下接する言い方が多くなっていることを指摘し、それらがその被修飾語の体言ぐらゐで、現実性の不透明な事態の様相を感覚や直観にたよりにつつ試写・概言する傾向を強めていること、その意味ではやはり推定の助動詞化にかかわることを述べた。上接成分の末尾に「といふ」や「といった」を用いて、その指示内容を婉曲化する言い方をよく見かけるようになったことや、指示語に直接下接する言い方に新しい語形が生じたことによるその勢力の減退にも触れた。

次に、単独性の用法の述語法について述べる。述語法については、まず「やうなり」や「やうだ」の下接語に関して注意すべきことがある。古代語の「やうなり」は、体言的に抽出された上接成分の様相を指定するだけの言い方であったから、次のように推量や推定の助動詞がさらに下接する

こともできた。それ自体が推定の助動詞になっていく近現代語の「やうだ(ようだ)」には、そのような助動詞の下接はもはや認められなくなる。

②あやにくにのがれきこえたまはんも、情けなきやうならん。(源氏・宿木)

・ 世のもどき軽々しきやうなるべし。(源氏・明石)

さて、近現代語の「やうだ(ようだ)」は、次にその一斑を示すように、その述語法においてとりわけ現実性の不透明な事態の様相を感覚や直観に頼りつつ推定するという意味あいを強める。

③又奥州さまのやうに、だしぬかれ給ひて、跡での御後悔見るやうな。なんと道安、さうではないか。(浮・けいせい色三味線・京・一)

・ 今夜は大ぶ土手が永やうだ。(酒・遊子方言)

・ 咽がひつつくよふだ、ト(人・春色梅児誉美・一・一)

・ されば長九郎あれを見やれ、慥に人がおよひで来るよふだ。一件ではあるまいか。(伎・与話情浮名横櫛・序幕)

・ 三公は何うかしたか、ひどく弱つて居るやうだなど(樋口一葉・たけくらべ)

・ 小林秀雄は政治家のタイプを、独創をもたずただ管

理し支配する人種と称しているが、必ずしもそうではないようだ。(坂口安吾・墮落論)

しかし、感覚や直観によって推定された認識は、うわべのことにとどまり、内実とは異なることも多い。そこで、次に示すように「やうなり√やうだ」の述語法には、それを中止法や逆接的な接続法の前句として、その推定とは対立する内実を後句に導く対比的な表現の例も多い。

㊦あたりは人しげきやうにはべれど、いとかごかにはべり。(源氏・夕顔)

・多田蔵人行綱が告げしらせて後は、君をも御うしろめたき事に思ひ奉て、うへには事なき様なれ共、下には用心して、にがわらひてのみぞありける。(覚一本平家・三・赦文)

・カタマシイウデコキノ英雄ヂヤゾ。ホムルヤウデ、ソシツタゾ。(玉塵・三4才)

・九月の節分も、遠ひやうでから、今の事じや。(浮・好色二代男・二・三)

・黒羽二重の紋なしも、竜門の中幅帯、目だゝためやうにて、目にたち、(浮・けいせい色三味線・江戸)

・さりながら其の言葉、うれしい様で恨み有り。(浄・心中重井筒・中)

・男といふものはどうもたのみになるやうで頼になら

ないもんだ。(人・春色梅児誉美・二・七)

・いらぬお世話のやふなれど、人の難儀を身にかへて助たいのが私の心願、(人・春色梅児誉美・二・九)

・手前は気強いやうでもよく泣くなア(三遊亭円朝・牡丹燈籠・七)

・局員四十有余名と言やア大層のやうだけれども、皆腰の曲つた老爺ぢいさんに非ざれば氣の利かない奴ばかりだらう。(二葉亭四迷・浮雲・一・一)

しかし、古代語の「やうなり」は基本的に現実のありようについての「なり」による指定表現であるから、右の第一・二例などでは、その後句との対比的な関係も偶然的といえるが、近現代語では「やうだ(ようだ)」が相対的に現実性の不透明な事態の様相を推定するものになってきただけ、その推定内容の当否はかならずしも当てにならないという一般の認識、ないしは、自覚もあり、それがこの種の複文構造の例を多くしているように思われる。そこには「やうだ(ようだ)」の述語法における確信のもてなさや、確信のもてないままに、おおよそのさまを捉えるという推定性が、最も顕著に現れていると見てよからう。

近現代語の述語法には、次に示すように「なにか」「どこか」「どうも」などの不定詞が共起して、不定的で判断とはしない形のまま、現実のありようのおおよそを試写・

概言し推定する傾向もめだつてきている。連体法にも同様の傾向が少し出ていた。

(29) 頭痛がいたして、あくびが出て、目がまふやうで、どふやら死ぬるやうにござりますが、(浮・けいせい色三味線・大坂)

・サアく呑ふく。なんだかちつと浮たやうだ。

(人・春色辰巳園・二・七上)

・久し振りでこなたの顔を見たゆゑ、どうか江戸へ帰つたやうだ。(伎・与話情浮名横櫛・二幕目)

・お国さん誰か来たやうだよ。(三遊亭円朝・牡丹燈籠・五)

・それがどうもあの男の眼の中には、娘の悶え死ぬる様が映つてゐないやうなのでございます。(芥川龍之介・地獄変・一九)

近現代語の述語法については、古代語にはあつた推量や推定の助動詞の下接が認められなくなる、現実のありようを感覚や直観を通じて推定する傾向が強まること、中止法や逆接的な接続法の前句に用いて、その様相とは異なる内実を後句とする対比的表現も多くなること、不定詞の共起によって、判断としないまま、そのおおよそのさまを不定的に推定する傾向もめだつてくること、などを述べた。

なお、近現代語の「やうだ(ようだ)」には、次のよう

に連用形の「やうに/やうで」を「ない」などと共起させる言い方も生じた。

(30) こぞに見しをりの様にもなく、よろづに変はりはてたる心地のするは、いかにぞや。(伊勢物語愚見抄)

・さやうになく候へば、五障の雲はいつまでも晴れ申さぬ也。(仮・竹斎・上)

・小身者なれど、兄も塩谷様の御家来なれば、ほかの世話するやうにもない。(浄・仮名手本忠臣蔵・六)

・今は、女郎衆の言葉がむかしの様ではねへといふから、(人・英対暖語・初・四)

・たばこばたけからもうもうとあがる湯気に向ふで、その家はしいんとして誰も居たやうではありませんでした。(宮沢賢治・風の又三郎)

これらの形は、推定の助動詞「やうだ(ようだ)」にとつては、そのたんなる連用法にとどまらず、打消との共起によるその否定態という見方が可能なものである。たとえば推定の助動詞「べし」にも「べからず」という否定態があつた。「やうだ(ようだ)」にもそれに準じる否定態の言い方が現れてきたと見れば、この点も近現代語における「やうだ(ようだ)」の助動詞化を不示現象の一つと見てよい。

五 結 び

古代語の「やうなり」は、抽象的な様相をおさえる形式名詞「やう」と指定の助動詞「なり」の連語であった。それが次第に一語化して、近現代語の「やうだ（ようだ）」は現実のありようのいわばおおよそを捉えるための助動詞になってきた。

その用法には、大別して様相の類似するもの同士を関係づける類縁性の用法と、その様相を単独に表示する単独性の用法とがあり、通時的な変化は概して後者のほうにめだつ。

類縁性の用法の、例示・一致・比況のうち、例示と一致の用法は、連用法と連体法に限られ、それらには通時的変化が乏しいが、比況の用法には述語法もそなわり、多少の通時的変化が認められた。その上接成分に連語「かなんぞ」や副助詞「でも」「か」が共起して、比況に用いられる様相自体を不定的に表示するようになる傾向がそれである。

その傾向は、近現代語の「やうだ（ようだ）」の単独性の用法、とりわけその述語法にめだってくる、現実性の不透明な様相を試写・概言する、推定の助動詞への変化に通じると見てよい。比況の用法にはその状況の類似度を強調する副詞の共起も多くなったが、それも推定の助動詞化に伴

う比況の機能の弱まりを、副詞の共起によって補強する現象と解せる意味で、同じ傾向の反映を見ることが出来る。

単独性の用法のうち、近現代語の連用法には、事柄の将来的な実現性を意図的にめざす、目的や目標を表す言い方がめだち、事柄を志向的に捉える傾向が強くなった。連体法には意識や感覚を表す類の体言、形式名詞「こと」「もの」の下接が増加しているが、そこには、その下接の体言ぐるみで、現実性の不透明な事態の様相を試写・概言する傾向が強まっているようである。述語法には全体に現実性の不透明な事態の様相を、主体の感覚や直観を通して、試写したり概言したりする意味での推定作用が高まっている。中止法や逆接的な接続法によってそれとは異なる内実を對比する表現や、不定詞によって不定的に様相を捉える傾向などもめだつが、その傾向には、確信のもてないまま、現実のありようのおおよそを推定するという特徴をうかがうことができる。

注

- (一) 形式名詞の働きについては、山口堯二「古代語の準体句構造」〔国語国文〕第六一卷第五号、平成四年五月、『構文史論考』平成二年、和泉書院)、同「格助詞起源の接続助詞とその周辺」〔日本語接続法史論〕〈平成八年、和泉書院〉

第十章三)において言及したことがある。

(二) 近世中期ごろまでは、次のような例が認められるが、その後はそれも消滅するようである。

・何をいふてもわたくしに、乳がなふてはいつまでも此子
がなじまふやうがない。(浄・芦屋道満大内鑑・四)

(三) 現代語のそれについては、国立国語研究所『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』(昭和二六・一九五二)年、秀英出版)に、「ようだ(ようです)」の意義・用法として、次の四つに分類された指摘がある。

① ある事物が他の事物に似ているという意味を表わす。
② 内容を指示することを表わす。ある事物が他の事物に等しいという関係。

③ 例示の意味を表わす(ある事物が他の事物に関する一例であるような関係)。

④ 不確かな、または円曲な断定の意味を表わす。

現代語のこの語をめぐるその後の研究は、たとえば、菊地康人「ようだ」と「らしい」——「そうだ」「だろう」との比較も含めて——(『国語学』第五一卷一号)がそうであるように、本稿にいう単独性の用法の中でも、後述する述語法を中心とし、しばしば「らしい」との対比に関心が集中している。他の用法を含めた語の用法全体が問われることは稀になっっている。

(四) 「か」の共起する言い方には以前にも触れたことがある。

山口堯二「特定方式の不確定成分—疑問助詞の不確定用法その他—」(大阪大学教養部研究集録(人文・社会科学))
三三、『日本語疑問表現通史』(平成二年、明治書院)第十章。

(五) 山口堯二「助動詞の伝聞表示に関する通史的考察」(京都語文)一一。

(六) この「べし」の連用法は、山口堯二「べし」の通時的変化」(京都語文)四)で通時の変化を概観するために行った意義分類では、事態の具体的な実現が実質的に見込まれるありようの中に含まれる。

(七) 山口堯二「推量体系の史的変容」(『国語学』一六五)。